

## 大学入門ゼミ・学科基礎ゼミナール推薦図書 (現代社会学科向け)

### ★★入門

書名	<b>ジオグラフィー入門 改訂新版</b>		
著者	高橋伸夫ほか編	刊行年	2008
出版社	古今書院	価格	2,500円
コメント	<p>まちづくり、観光、大震災、新幹線、サッカー、カーリなど、31のさまざまな面白いトピックから構成される本書は、皆さんが考えている「地理」のイメージをガラッと変えることでしょう。大学で学ぶ地理学は高校で学ぶ「地理」とは異なり、さまざまな事柄が対象であり、答えがまだ見つかっていない社会の問題に挑んでいく学問です。高校で「地理」を選択しなかった人にもわかりやすい内容で、大学で学ぶ地理学の一端を紹介していきます。</p>		

### ★★基礎

書名	<b>まなざしの地獄 — 尽きなく生きることの社会学 —</b>		
著者	見田宗介	刊行年	2008
出版社	河出書房新社	価格	1296円
コメント	<p>1973年初出の有名論文を単行本化したもの。新たに付された大澤真幸氏の解説と併せて読むと、理解がしやすい。</p> <p>4人を射殺した犯人として1969年に逮捕された19歳の少年N・Nを手がかりとして、当時の日本社会を分析している。ある人間・ある事件を、例外事例としたり個々の内面の問題として扱うのではなく、その人間が置かれている諸関係や社会構造という観点で読み解くその手つきから、社会学という学問がどのようなものか、考えることができるだろう。「統計的な事実の実存的意味」「実存的な諸事実の統計的意味」という表現が登場するが、事例とデータの関係についても、注目してほしい。</p> <p>この本をきっかけに社会学を学ぶのであれば、社会学について順を追って丁寧に考える文体の『社会学入門一歩前』(若林幹夫)や、オーソドックスな社会学の領域を押さえている『社会学講義』(橋爪大三郎/大澤真幸他)などを手にとってみるとよい。</p>		

### ★★基礎

書名	<b>社会調査のウソ — リサーチ・リテラシーのすすめ —</b>		
著者	谷岡一郎	刊行年	2000
出版社	文藝春秋	価格	842円

コメント	<p>大学生であれば、さまざまなデータを探し、読み解き、ときには自ら分析することが求められる。しかし、そのデータのもととなっている調査が、どれほど信頼に足るものか、考えたことはあるだろうか。また、日常的に目にするニュース報道がどのように私たちに情報を提示しているか、普段どれだけ注意して見ているだろうか。</p> <p>この本は、適切とはいえない調査やその結果を報じた新聞記事をとりあげながら、社会調査の結果を読み解く際のポイントや調査の方法について、より多くの人を読みやすい文体で書かれている。若干古い本だが、多くの人が目にしやすい新聞というメディアを素材としつつも、社会調査の専門的な知識も挿し込んでいる点で、バランスがよい。ただ、『社会調査法入門』（盛山和夫）や『入門・社会調査法〔第3版〕』（轟亮・杉野勇編）などの、社会調査に関するオーソドックスな教科書も手にとりつつ、社会調査について学ぶべき項目を体系的に把握しておくことも同時に必要。</p>
------	---

★★入門

書名	<b>心理学・入門 — 心理学はこんなに面白い —</b>		
著者	サトウタツヤ・渡邊芳之	刊行年	2011
出版社	有斐閣アルマInterest	価格	1995円
コメント	<p>心理学は実に幅が広い。「心のケア」ばかりが心理学ではない。心理学を大学で本格的に学んでみようと考えている人は、ぜひ本書を読んで、その奥深さを感じ取っていただきたい。</p>		

★★入門

書名	<b>「あたりまえ」を疑う社会学—質的調査のセンス—</b>		
著者	好井裕明	刊行年	2006
出版社	光文社新書	価格	777円
コメント	<p>世の中で「あたりまえ」のこととして流布している言説を鵜呑みにしていたのでは、学問の営みは始まらない。本書は社会学の立場から、「あたりまえ」を疑うことから始めていく研究——なかでも数量的ではないデータを扱う研究＝質的研究——のセンスについて、筆者独特の語り口で綴られている。</p>		

★★入門

書名	<b>マヤ文明—密林に栄えた石器文化—</b>		
著者	青山和夫	刊行年	2012
出版社	岩波新書	価格	800円

コメント	ジャングルにそびえ立つ神殿ピラミッド、広場に林立する石碑、交易に用いられた黒曜石……。マヤ文明は中米の密林に花ひらき、16世紀まで繁栄した究極の石器文明だった。マヤの支配層は、コロンブス以前のアメリカ大陸で文字、暦、算術、天文学を最も発達させた。もはやマヤ文明を謎と神秘のベールに包んで論じる時代ではない。マヤ文字は王の事績を語り、考古学は実際に生きていた貴族や農民の暮らしを具体的に明らかにする。最新の研究成果に基づいて、マヤ文明の実像に迫る。
------	---

### ★★入門

書名	<b>ワークショップ 人間関係の心理学</b>		
著者	藤本忠明・東正訓(編)	刊行年	2004
出版社	ナカニシヤ出版	価格	2160円
コメント	人が他者に好意を持つには、どのような要因が関与するのだろうか。また、より良い対人コミュニケーションを形成するためには、どのような点に留意すれば良いのであろうか。本書では、主として大学生の人間関係に焦点を絞り、効果的な対人関係のあり方について心理学的な視点から説明がなされている。質問紙などを活用した体験型の学び(ワークショップ)の工夫もされているので、自己理解を深めながら読み進めることができる。		

### ★★基礎

書名	<b>忘れられた日本人</b>		
著者	宮本常一	刊行年	1984(原本1960)
出版社	岩波文庫	価格	735円
コメント	この本が書かれたのは、高度経済成長期まっただ中の日本。大量のものを効率よく生産し過剰に消費するサイクルのなかに人びとのくらしが巻き込まれていった時代。あまりにも急激な環境の変化は、生活文化に新旧の断絶をもたらした。過去のくらしは遅れたものとして急速に忘れ去られようとしていた。そんな激流の中で、「ただかんたんに忘れてよいのだろうか」という思いが本書によって刻まれた。わたしたちがこれから先どんな道を歩むのかを定めるためにも、忘れられた存在の声に耳を傾け、過去に学ぶ作業は必須となるだろう。民俗学者である著者の歩みと日本の近現代史が重なる『民俗学の旅』(講談社学術文庫)も合わせて読みたい。		

### ★★基礎

書名	<b>現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—</b>		
著者	見田宗介	刊行年	1996

出版社	岩波書店	価格	640円
コメント	<p>つぎつぎとモノが欲しくなり、まだ使えるけれど、新しいモノを買い続ける私たち。つい新製品を試してみたいくなる私たち。このような消費社会に生活する私たちひとりひとりが買い物をするという行為が、同じ時間を生きている「南」の国に、あるいは10年、20年先の未来に及ぼす影響について考える手がかりを与えてくれる本。一生出会うことがない遠くの国や、遠い未来の人たちの生活に想像力を働かせ、共感して、行動することができるようになるために、読んで欲しい本。</p>		

★★基礎

書名	<b>自分でできるストレス・マネジメント －活力を引き出す6つのレッスン－</b>		
著者	島津明人・島津美由紀	刊行年	2008
出版社	培風館	価格	1470円
コメント	<p>ストレスは目に見えない。より正確に言えば、現代社会では、目に見えない問題をまとめてストレスと呼んでいるのである。本書では、目に見えない問題を、見えるようにして、管理(マネージ)するための方法が書かれている。一般人向けに書かれた入門書なので、内容が表面的であることは否めない。それでも本書を読むと、心理学が、どのように「こころ」を扱おうとしているのかが端的に分かるだろう。</p>		

★★基礎

書名	<b>「痴呆老人」は何を見ているのか</b>		
著者	大井玄	刊行年	2008
出版社	新潮新書	価格	700円
コメント	<p>認知症について考えることを通して、自分のことを理解する助けになる本。病と健常を区別するのではなく、両者を同じ次元においてみると、多くの新鮮な発見がある。「認知症」「ストレス」「自己」「記憶」「人格」「生きづらさ」「ひきこもり」などの言葉に興味をもつひとには、とくに読んでほしい。これから心理学を学ぼうとするひとにとっては、すこし難しく、すごく参考になる。</p>		